A.シュッツにおける２つの「意味」概念

R. Heiskalaによる

シュッツの「意味」概念批判によせて

大黒屋　貴稔

１．はじめに

シュッツが、ウェーバーの理解社会学の構想を批判的に継承するなかで「意味」という現象を、意識が「反省」を通じて生成するものと定義したことは、つとに知られている。シュッツのこうした「意味」概念を、フィンランドの社会学者でありプラグマティストである Risto Heiskala は、「反省」という認知作用との関連でのみ「意味」をみる「認知主義者（cognitivist）」のそれであると批判している（Heiskala 2011:231f.,238）。

しかしながら、シュッツの「意味」という概念の使い方をつぶさに調べてみると、そうした定義とは異なるニュアンスで、この「意味」という概念が用いられているケースも少なからずあることに気がつく。そうしたケースにみられるような、それとして明確には定義されていない「意味」概念にまで目を向けた場合、Heiskala の上の批判は妥当であるといえるだろうか。

シュッツの「意味」概念に関しては、これまで、彼により明確に定義された「意味」概念のみが主題として論じられ、明確には定義されなかった「意味」概念はというと、その存在に関して若干の事柄が示唆されるにとどまっており[1]、実質的にはほとんど何も論じられてこなかったといってよい。だが、シュッツは、彼により明確には定義されなかった「意味」概念を特に断ることなく随所で用いており、そのことが、彼の「意味」に関する言説に一定の曖昧さをもたらす結果となっている。そうであるのなら、シュッツの「意味」概念に関して精確に論じようとすれば、明確には定義されなかった「意味」概念をも主題として取り上げ論じることが必要であろう。

本稿で考察してみたい問いとは次のようなものである。シュッツによって明確には定義されなかった「意味」概念とはいかなるものであるのか。この概念と彼により明確に定義された「意味」概念とをあわせみたとき、これら２つの「意味」概念は、現象学的な社会学というシュッツの思想においていかに位置づけられるのか。本稿では、Heiskala の批判を導きの糸としながら、これらの問いに対する回答を模索してみたい。

以下ではまず、シュッツによって明確に定義された「意味」概念の概要を確認する。ついで、この「意味」概念に対しなされた Heiskala の批判の趣旨を検討する。それから、こ

[1] たとえば、西原（1981:18）、Embree（1991:207）、Endreß, Srubar（2003:172）等を参照のこと。

れらの成果を踏まえつつ、シュッツによって明確には定義されなかった「意味」概念とはいかなるものであるのか明らかにする。そして最後に、シュッツの思想において、これら２つの「意味」概念はどのように位置づけられるのかという点について考察する。

２．シュッツにおける「第１の意味」概念

シュッツによると、ウェーバーは、「行為に結びつけられた主観的な意味」（Weber 1920:1=1987:7）というその解明が理解社会学の中心をなす概念において、「行為の動機」を「意味」とみなしているという。その結果、「意味」は、それが有する「本来の幅と普遍性」を切り詰められ、「行為」との関連に狭く局限してとらえられてしまっている。ウェーバーの「意味」概念をそのように批判したうえで、シュッツは、「意識（Bewußtsein）」と「体験（Erlebnis）」というより広いパースペクティブから、自身の「意味」概念の彫琢を開始する（Schütz 1932:16=1982:30f.）。

シュッツによれば、「意識」とは、「ある今そのようにから新たな今そのようにへの絶えざる移行」の中で、「体験」が不断に生成され消失される「体験の流れ（Erlebnisfluß）」[2]である（Schütz 1932:43ff.,59=1982:61ff.,79）。

「意識」においてそのように不断に生成・消失される「体験」は、それ自体として「意味」をもつものではない。それは、意識によって「反省（Reflexion）」という回想のまなざし[3] のもととらえられ、「何らかの」体験として規定されてはじめて、有意味になるとされる[4] 。シュッツは、意識によって「反省」を通じて「体験」に付されるこの「何らかの」という規定を、「意味（Sinn）」とよぶ。また、そのように意識が「反省」を通じて「体験」に規定を付すことを「意味付与（Sinngebung）」と称する（Schütz 1932:39f.,72ff.=1982:56f.,96ff., Schutz 1944:271）。

それゆえ、「意味」とは、「個々人の意識の流れにおいて生じる一定の体験に内在している特性ではなく、現在のいまから反省的な態度をもって過去の体験を解釈した結果である、ということになる。私が、〔体験〕作用の対象に向けられることによってその作用のなかで生きている限り、そうした作用はいかなる意味ももっていない。私がこの作用〔それ自体〕を・・・回想の中で把握してはじめて、それは有意味となる」のである（Schütz 1945a:210 =1985:13, 括弧内は筆者、強調は原著者による）。

以下では、このように、意識によって「反省」を通じて「体験」に付与される「意味」

---

[2] こうした「体験の流れ」は「意識の流れ（Bewußtseinsstrom）」とも称される（Schütz 1932:43=1982:61）。

[3] シュッツは、こうした「反省」の一種として「企図（Entwurf）」をあげ、そうした「企図」にその実行に際し方向付けられている諸体験を「行為（Handeln）」と定義している。シュッツによれば、「企図」とは、行為目標をその実行可能性に条件付けられつつ未来完了時制で予想することであり、「行為」は、この「企図」によって「何らかの」という「意味」を付与されるという（Schütz 1932:55-60,64f.,247=1982:74-81,85ff.,301, Schutz 1945b:586, Schutz 1951:68f.=1983:142f., Schutz 1959:289=1991:385, Schütz, Luckmann 1984:14）。なお、この点に関連する議論を、大黒屋（2002）（2011）にておこなったことがあるので、参看願えれば幸いである。

[4] このように「反省」というまなざしのもととらえられ有意味となった「体験」を、シュッツは「経験（Erfahrung）」とよんでいる（Schütz, Luckmann 1984:13）。

を、「体験的意味」とよぶことにしたい。また、シュッツが明確に「意味」と定義しているは、この「体験的意味」であることから、それをシュッツにおける「第１の意味」概念と位置づけ、それに対する Heiskala の批判をみていくことにしたい。

３．シュッツの「第１の意味」概念に対する Heiskala の批判

Heiskala によれば、シュッツがウェーバーの「意味」概念に対して行った「外延の狭さ」という指摘は、シュッツの「意味」概念それ自体にもあてはまるという。シュッツの「意味」概念は、なるほど、ウェーバーの「意味」概念の外延を大幅に広げたことは確かであるが、それでもなおその外延では狭いというのである。

Heiskala は、意識の以下の２つの局面を区別することから、シュッツの「体験的意味」概念に対する批判を開始する。

（Ⅰ）意識が外的対象へと向けられている局面
（Ⅱ）意識がそれ自身の体験を反省している局面

（Ⅰ）とは、体験の流れにおいて不断に生成・消失していく体験を通じて、意識が何らかの外的な対象へと向けられている局面である。（Ⅱ）とは、意識が外的な対象ではなくそれ自身の体験を反省という回想のもととらえている局面である [5]。「〔外的な〕対象に向けられることによってその作用のなかで生きている限り、そうした作用はいかなる意味ももっていない」という言い方に端的にみてとれるように、シュッツの「意味」概念は、もっぱら（Ⅱ）の局面にかかわるものであり、この局面においてのみ「意味」は付与されるとみなすものである。そこでは、（Ⅰ）の局面は「意味」概念の埒外にあるとされ、「意味」の全く生じない局面とされている。

シュッツの「体験的意味」をそのように特徴づけたうえで、Heiskala はそれを次のように批判する。この概念は「意味を反省・・・として理解している点で、分析の領域を大幅に制限してしまって」おり、「意味という現象の主要部分をまったく分析しないまま放置する結果となっている」。というのも、ブルデューの habitus 概念が明らかにしたように、（Ⅰ）のような局面においてもうすでに、何らかの「意味」が生じていると考えざるをえないからである。それゆえ、そうした局面における意味生成に着目した諸理論によって、シュッツの「意味」概念は、補完されるべきであろう（Heiskala 2011:236ff.,240f.）。

シュッツにおける「第１の意味」概念である「体験的意味」に関する限り、Heiskala のこうした批判は妥当なものといえるだろう。しかしながら、シュッツの「意味」という概念の使い方をつぶさに調べてみると、それとは異なるニュアンスで「意味」という概念が用いられているケースもあることに気がつく。それらのケースにまで目を向けた場合、Heiskala のこうした批判は妥当性を失うというのが、私たちの見解である。以下ではそのよ

[5] Heiskala は、（Ⅰ）の局面を「受動的」、（Ⅱ）の局面を「能動的」であるとし、意識の受動性と能動性の区別と、（Ⅰ）と（Ⅱ）の区別とを重ね合わせてとらえている（Heiskala 2011:236f.）。しかしながら、シュッツは、（Ⅱ）の局面においてのみならず、（Ⅰ）の局面においてももうすでに意識の能動性をみとめており（Schütz 1932:52f.=1982:71ff.）、Heiskala のこうした重ね合わせは必ずしも精確なものであるとはいえない。

うなケースにおける「意味」概念を、シュッツがそれと明確に定義していないことから、「第２の意味」概念と位置づけ、それがいかなる内容をもつものであるか、みていくことにしたい。

４．シュッツにおける「第２の意味」概念

シュッツの「第２の意味」概念は、フッサールの「意味」概念をそのまま継受したものとみることができる。

フッサールによれば、対象は「何か」（「鉛筆」「机」「書棚」etc.）として自存的に存在するのではなく、意識によって「何か」として規定され、そうした規定を帯びた存在へと構成されるという。意識によって対象に付されるこの「何か」という規定を、フッサールは「意味（Sinn）」とよぶ。また、そのように意識が対象に対し規定を付すことを「意味付与（Sinngebung）」と称する。意識は、「何かについての意識である」という志向性をその根本性格としており、そうした志向性において不断に「意味」を対象に「付与」し、「意味」を帯びた存在へと構成していると、フッサールはいう。

> 意味をもつということ、すなわち或るものを「意味においてもつ」ということが、あらゆる意識の根本性格なのである。それゆえに意識は、ただ単に一般に体験であるばかりでなく、〔その対象を〕意味においてもつ体験、つまり「ノエシス的な」体験でもあるのである（Husserl 1950:185=1984:112f., 括弧内は筆者）。

シュッツは、その研究の当初より一貫してフッサールのこうした「意味」概念について知っていた。たとえば、1932 年に公刊された生前唯一の著作『社会的世界の意味構成』（以下『意味構成』と略記）の第 5 節において、フッサールの『イデーン』第 1 巻の 85 節「感覚的ヒュレーと志向的モルフェー」を参照するよう指示したうえで、次のように述べている。

> 私たちは、意識の特定の対向において、周囲世界の理念的対象や現実的対象をとらえるや否や、「それらは何らかの意味を帯びている」というのである。フッサールの『イデーン』以来、意味付与が志向性の能作に他ならないことを私たちは知っている。意味付与という志向性の能作によってはじめて、純然たる感覚的な諸体験（「ヒュレー的与件」）は、「生気づけられる」のである。したがって、一瞥して意味のあるものとして私たちに現出するものも、まずもって私たちの意識のこうした志向性により何らかの意味あるものへと構成されたのである（Schütz 1932:33=1982:49）。

また、渡米後の 1945 年に書かれた論文「多元的現実について」の第２節でも、現実を構成するのは自存的に存在する対象ではないとして、シュッツは同様に『イデーン』第１巻を参照するようもとめ、その 55 節「むすび：すべての現実は「意味付与」によって存在するということ」における「すべての現実の統一体は意味の統一体である」（Husserl 1950:106=1979:238）というフッサールの見解を、その傍証として引きあいに出している（Schutz 1

945a:230=1985:76）[6]。

シュッツは、こうしたフッサールの「意味」概念を自らの「意味」概念としてもまた、その論考の随所[7]で使用したのであった。たとえば、T. パーソンズの『社会的行為の構造』に関する 1940 年の書評草稿において、次のように述べている。

> 私は、この世界の対象が私にとって何かを意味している限りで、それらに関心を向けている。[中略] この世界は、わたしにとって意味をもつばかりでなく、あなたにとってもあなたがたにとっても、また誰にとっても意味をもっている（Schutz 1960:9=1991: 27, 強調は筆者による）。

> 私は、多様な関係を通して他者たちと結びついているひとりの人間として、社会的世界のなかで生を営んでいる。そうした私にとって、この社会的世界は、有意味的なものとして解釈しなければならないひとつの対象である。社会的世界は、私にとって意味をもっているのである。そのうえ私は、この社会的世界が他者たちにとってもまた意味をもっていると確信している（Schutz 1960:15=1991:34, 強調は筆者による）。

また、1953 年の論文「人間行為の常識的解釈と科学的解釈」では次のように述べられている。

> この世界が文化の世界であるのは、日常生活の世界が私たちにとってはじめから意義の宇宙だからである。すなわちこの世界は、私たちがそのなかで占めている自らの相対的位置を見出そうとすれば、そしてまたそれに対処しようとすれば、解釈しなければならない意味の布地だからである（Schutz 1953:10=1983:58, 強調は筆者による）。

私たちは、こうしたシュッツにおける第２の「意味」概念を、それが意識の向かう「対象」に関するものであることから「対象的意味」とよぶことができるだろう。シュッツは、研究の当初より一貫して、こうした「対象的意味」の概念をフッサールが「意味」概念として用いていたことを知っていたし、また自らの「意味」概念として用いることもしてきたが、それを主題として論じ、明確に定義することは終生なかったのである。

５．むすびにかえて ── 「２つの態度」としての「意味」概念

以上、Heiskala の批判を導きの糸として、シュッツにおける２つの「意味」概念について考察をおこなってきた。その議論をまとめるとすれば、つぎのようになる。

シュッツの用いる「意味」概念には２つのヴァージョンがある。１つは、意識によって「反省」を通じて「体験」に付与される「体験的意味」というヴァージョンである。もう

---

[6] この点については、同箇所のフッサールの見解がより広範な形で引用されている Schütz, Luckmann（1984:385）も参照のこと。

[7] Schutz（1940:135=1983:217）、Schutz（1953:5=1983:52）、Schutz（1954:55=1983:118）、Schutz（1960:7=1991:24）等においてもまた、こうした「意味」概念の使用例はみられるので、参照されたい。

１つは、意識によって「志向性」を通じて「対象」に付与される「対象的意味」というヴァージョンである。シュッツは前者のヴァージョンを「意味」と定義したのに対し（シュッツにおける「第１の意味」概念）、後者のヴァージョンはそれと明確に定義することはなかった（シュッツにおける「第２の意味」概念）。

Heiskala の批判は、シュッツの「意味」概念を「体験的意味」と解する限りにおいて、妥当なものである。確かにその場合、Heiskala の指摘するとおり、シュッツの「意味」概念は、意識が外的対象に向けられている局面での意味生成をその埒外としている。だが、その「意味」概念には、「対象的意味」というヴァージョンも存在するという事情にまで目を向けた場合、Heiskala のそのような批判は妥当性を失う。なぜなら、「対象的意味」とは正に、意識が対象に向けられている局面において対象に付与される「意味」に他ならないからである。

それでは、「体験的意味」と「対象的意味」というシュッツの「意味」概念の２つのヴァージョンは、シュッツの思想においていかに位置づけられるだろうか。シュッツは、意識の「根本構造（fundamental structure）」（Schutz 1942:174=267）として、つぎの「２つの態度」をあげている。

> 私たちはいましがた〔意識の根本をなす〕相異なる２つの態度を特徴づけた。第１の態度とは、自らの作用の対象に向けられながら、そうした作用のなかで生きているという態度であり、第２の態度とは、〔意識が〕それによって自らの諸作用に対向する、反省的な態度である（Schutz 1942:172=1983:264, 括弧内は筆者）[8] [9] [10]。

「体験的意味」と「対象的意味」というシュッツの「意味」概念の２つのヴァージョンは、意識の「根本構造」をなすこれらの「２つの態度」に相関する項としてとらえ得るという

---

[8] Schutz（1942:169,174=1983:261,268）、Schutz（1945a:212f.=1985:16）、Schutz（1970=1996:126）等においてもまた、こうした２つの態度についてはふれられているので、参照されたい。

[9] シュッツは『意味構成』では、ベルクソンをふまえつつ、意識の「根本構造」をなすこれら「２つの態度」を「持続における生（das Leben in der Dauer）」と「空間時間的世界における思考（das Denken in der raumzeitlichen Welt）」と表現している（Schütz 1932:72f.=1982:95f.）

[10] ルーマンも、これと全く同一の事態を、意識の「２重安定性（Bi-Stabilität）」と表現し、「他者言及と自己言及」という「２側面の形式」を意識は免れ得ないとしている（Luhmann 1987:65）。

> 他者言及と自己言及の区別は、意識に対し、その作動の更なる経過において、現象に関する問題が浮上するのか、それとも意識それ自体に関する問題が浮上するのかということを、常に未定のままに保持している。こんな物で一体何ができるというのか。人はそのように問うことができるだろう。さもなければ ── 私が思い違いをしているのであろうか。〔人はそのようにも問うことができるだろう。〕志向しつつ作動するとは、他者言及と自己言及の間で常に振動することであり、こうした仕方でそれは、意識が永遠に世界へと没頭したり、永遠に自らの内で休らったりということを妨げているのである」（Luhmann 1996:34f., 強調・括弧内は筆者による）。

のが、私たちの見解である。その第１の態度とは、意識が「対象的意味」を付与する際にとる態度のことであり、第２の態度とは、意識が「体験的意味」を付与する際にとる態度のことに他ならないからである。

しかしながら、このように、シュッツの「意味」概念の２つのヴァージョンが、意識の「根本構造」であるこれらの「２つの態度」に相関するものであるとすると、なぜそのうち一方は「意味」と定義され、他方はそう定義されなかったのかということが、問題となってくる。前者がウェーバーの「意味」概念に、後者がフッサールの「意味」概念に由来するものであることを思い返すなら、こうした点に関する考察は、シュッツが「意味」という問題で両者の思想から何を受容し何を受容しなかったのか詳細に検討してみることによって、可能となるであろう。私たちの見通しでは、シュッツがウェーバーから継受し洗練させた「主観的意味」と「客観的意味」の区別という問題が、この点には大きく関わっている。今は立ち入らず今後に残された課題としたい。

引用・指示文献

Endreß, Martin, Srubar, Ilja, 2003, “Anmerkungen der Editoren,” in: Martin Endreß / Ilja Srubar (Hrsg.), *Alfred Schütz Werkausgabe Band V.1: Theorie der Lebenswelt 1*, UVK Verlagsgesellschaft, SS.164-176.

Embree, Lester, 1991, “Notes on the Specification of “Meaning” in Schutz,” *Human Studies* 14, pp.201-218.

Heiskala, Risto, 2011, “The Meaning of Meaning in Sociology. The Achievements and Shortcomings of Alfred Schutz’s Phenomenological Sociology,” *Journal for the Theory of Social Behaviour* 41(3), pp.231-246.

Husserl, Edmund, 1950, *Ideen zur einer reinen Phänomenologie und Phänomenologischen Philosophie*, Erstes Buch, *Husserliana* Bd.Ⅲ, Martinus Nijhoff.（1979 年･1984 年、渡辺二郎訳『イデーンⅠ－Ⅰ・Ⅱ』みすず書房、原著書の引用･指示ページは 1913 年刊行の初版による）

Luhmann, Niklas, 1987, “Die Autopoiesis des Bewußtseins,” in: Alois Hahn / Volker Kapp (Hrsg.), *Selbstthematisierung und Selbsterzeugnis: Bekenntnis und Gedächtnis*, Suhrkamp, SS.25-94.（引用･指示ページは *Soziologische Aufklärung* 6 による）

Luhmann, Niklas, 1995, *Soziologische Aufklärung* 6, Westdeutscher Verlag.

Luhmann,Niklas, 1996, *Die neuzeitlichen Wissenschaften und die Phänomenologie*, Picus Verlag.

西原和久、1981、「社会学における〈意味〉の問題――M.ウェーバーと A.シュッツを中心に――」『社会学評論』32（2）：17-36

大黒屋貴稔、2002、「意味と自己言及――シュッツとルーマンの「意味」概念の比較考察――」『ソシオロジカル・ペーパーズ』11：42-50

大黒屋貴稔、2011、「顕在的な統一体と潜在的な統一体――「分析的リアリズム」をめぐるシュッツとルーマンのパーソンズ批判を手掛かりとして――」『ソシオロジカル・ペーパーズ』20：1-10

Schütz, Alfred, 1932, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die Verstehende Soziologie*, Springer Verlag.（1982 年、佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』木鐸社）

Schutz, Alfred, 1940,“Phenomenology and Social Sciences,”in: Marvin Farber(Ed.), *Philosophical Essays in Memory of Edmund Husserl*, Harvard University Press, 1940, pp.164-186.（引用･指示ページは *Collected Papers I*（『アルフレッド･シュッツ著作集 第１巻 社会的現実の問題〔Ⅰ〕』）による）

Schutz, Alfred, 1942,“Scheler’s Theory of Intersubjectivity and the General Thesis of the Alter Ego,”*Philosophy and Phenomenological Research* 2, pp.323-347.（引用･指示ページは *Collected Papers I*（『アルフレッド･シュッツ著作集 第１巻 社会的現実の問題〔Ⅰ〕』）による）

Schutz, Alfred, 1944,“Fragments toward a Phenomenology of Music,”in: F.J. Smith(Ed.), *In Serch of Musical Method*, Gordon and Breach Science Publishers, 1976, pp.5-72.（引用･指示ページは *Collected PapersⅣ* による）

Schutz, Alfred, 1945a,“On Multiple Realities,”*Philosophy and Phenomenological Research* 5, pp.533-576.（引用･指示ページは *Collected Papers I*（『アルフレッド･シュッツ著作集 第１巻 社会的現実の問題〔Ⅱ〕』）による）

Schutz, Alfred, 1945b,“Choice and Social Sciences,”in: Lester Embree(Ed.), *Life-World and Consciousness: Essays for Aron Gurwitsch*, North Western University Press, 1972, pp.564-590.

Schutz, Alfred, 1953,“Common-sense and Scientific Interpretation of Human Action,”*Philosophy and Phenomenological Research* 14, pp.1-37.（引用･指示ページは *Collected Papers I*（『アルフレッド･シュッツ著作集 第１巻 社会的現実の問題〔Ⅰ〕』）による）

Schutz, Alfred, 1954,“Concept and Theory Formation in the Social Sciences,”*Journal of Philosophy* 51, pp.257-274.（引用･指示ページは *Collected Papers I*（『アルフレッド･シュッツ著作集 第１巻 社会的現実の問題〔Ⅰ〕』）による）

Schutz, Alfred, 1960,“The Social World and the Theory of Social Action,”*Social Research* 27, pp.203-221.（引用･指示ページは *Collected Papers II*（『アルフレッド･シュッツ著作集 第３巻 社会理論の研究』）による）

Schutz, Alfred, 1962, *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, Martinus Nijhoff Publishers.（1983 年･1985 年、渡部光･那須壽･西原和久訳『アルフレッド･シュッツ著作集 第１巻･第２巻 社会的現実の問題〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕』マルジュ社）

Schutz, Alfred, 1964, *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, Martinus Nijhoff Publishers.（1991 年、渡部光･那須壽･西原和久訳『アルフレッド･シュッツ著作集 第３巻 社会理論の研究』マルジュ社）

Schutz, Alfred, 1970, *Reflections on the Problem of Relevance*, Yale University Press.（1996 年、那須壽･浜日出男･今井千恵･入江正勝訳『日常世界の構成――レリヴァンスの現象学』マルジュ社）

Schutz, Alfred, 1996, *Collected PapersⅣ*, Kluwer Academic Publishers.

Schütz, Alfred, Luckmann, Thomas, 1984, *Strukturen der Lebenswelt* Bd.Ⅱ, Suhrkamp.

Weber, Max, 1920, *Wirtschaft und Gesellschaft: Grundriß der verstehenden Soziologie*, J.C.B. Mohr.
（1987 年、阿閉吉男･内藤莞爾訳『社会学の基礎概念』恒星社厚生閣、原著書の引用･指示ページは 1972 年刊行の Fünfte, revidierte Auflage による）